

特集：ブックトラック

ブックトラック その史的考察

奥泉 和久



復興開館時の図書館カード目録編纂室、ブックトラックが確認できる（東京帝国大学附属図書館編『東京帝国大学附属図書館記念帖』ヘラルド社、1930）
東京大学総合図書館 所蔵

はじめに

ブックトラックがはじめて文献で紹介されたのは、川崎操『書架考・書庫と湿気』（芸艸会、1933）のようだ。ここには姉崎正治が、アメリカ視察から土産に持ち帰り、これを最初の輸入としている。川崎は、姉崎が文車と命名したこと、また、日本古来にも文車があったことにもふれ、書棚の類に小さい車を四つ付けて、これに書巻を載せ、室内に備え置く道具と説明している¹⁾。この系統の文車には、上記の説明とは別に荷車として屋外で運搬の役割を担うものがあったが²⁾、いずれも後世には伝わらなかったとされる。これより少し前になるが、間宮不二雄編『図書館辞典』（文友堂、1925）の項目にはブックトラックはまだ掲載されていない。この頃は、まだブックトラックを知る人が少なかったのではないか。

ブックトラックについては、以前にもその機能と役割について本誌で考えたことがあり³⁾、この特集にあたり再度整理してみたが、再論のようなかたちになるかもしれない。予めお断りしておく。

1. 導入の経緯

1923（大正12）9月、関東大震災で東京帝国大学附属図書館は全壊した。直後の11月、責任をとって初代館長の和田万吉が辞任、その後任には宗教学者の姉崎正治が就いた。翌年12月、アメリカのロックフェラーから図書館復興資金を寄付するとの申し出があり、年が明けた1925年5月、姉崎は図書館施設の見学とロックフェラーに会うために渡米する。姉崎は、現地でアメリカの図書館員

に見てもらうために建築図面を持参していて、このときにブックトラックについてもアドバイスを受けている。ブックトラックの導入は、フロアに段差がないことが前提で、建築の影響を大きく受けると指摘された姉崎は、設計を変更するため日本に電報を打った⁴⁾。7月、帰国するときにブックトラックを持ち帰ったという。

では、そのブックトラックは、どこで走り始めたのか。1923年から1928年の5年間、東京帝国大学附属図書館は、医学部の耳鼻咽喉科の地下に仮事務所を置いていた。姉崎もそこに粗末な一室を構え、復興事業に当たった。その頃、文部省から「勤儉奨励強調についての通知」を受けた姉崎は、これを機に館内に「条項」や「語録」を配布、または壁に貼りつけるなどして館員に指示を出している。そのひとつに「書籍、箱、トラックの置方に注意して物と物とが互いに平行又は直角になる様にする事」⁵⁾があった。スタートしたのは仮事務所、姉崎が「トラック」といっていたこと、また、手狭な仮住まいでの効率的な作業を目指していたことがわかる。若い司書官たちは、洪水のように

- 1) 川崎操は、のちに「書架の変遷と近代建築」『図書館研究』（図書館職員養成所図書館学会）（復刊2号、1955.6）でほぼ同様のことを述べている。
- 2) 松蘭斎「文車考：院政期「有職故実」理解の一視点」院政期文化研究会編『院政期文化論集5』森活社、2005
- 3) 奥泉和久「図書館サービス もの・がたり 4：ブックトラック その多様な機能」『LISN』166号、2016.1
- 4) 姉崎正治『わが生涯』養徳社、1951
- 5) 薄久代編著『色のない地球儀：資料・東大図書館物語』同時代社、1987